

応用生態工学研究会ニュースレター No. 15

Ecology and Civil Engineering Society (E C E S)

2001年(平成13年)7月10日(火)発行

〔発行所〕 応用生態工学研究会事務局：〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル226号室

TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520 E-mail: see@blue.ocn.ne.jp

〔発行者〕 応用生態工学研究会(編集責任者: 幹事長 谷田一三, 事務局長 熊野可文)

第15号 目次

はじめに

1. 第15回幹事会・第14回理事会報告
2. 「生態学リサーチマネジメントをアシストする勉強会」開催報告
3. 会誌「応用生態工学」3巻1号増刷お知らせ
4. 第5回大会開催案内
  - (1) スケジュール
  - (2) 研究発表募集
  - (3) 参加料
5. 奨励研究募集開始
6. 地域だより
  - 1) 札幌だより
  - 2) 交流委員会・名古屋だより
  - 3) 福岡だより
  - 4) 松山だより
7. いろいろなニュース

新著紹介

- ・「滋賀の両生類・は虫類・ほ乳類—図解ハンドブック」松井正文監修
- ・「日本近海産貝類図鑑」奥谷喬司編著
- ・「北上川物語」三陸河北新報社編
- ・「生態系を蘇らせる」鷺谷いづみ著
- ・「環境保全の理論と実践」森 誠一監修・著

8. 事務局報告

はじめに

第5回大会をはじめ現地ワークショップ等も各地で開催されます。皆様の御参加をお待ちしております。

1. 第5回大会開催・研究発表論文募集!  
開催月日: 2001年9月29日(土)・30日(日)  
会場: 東京北の丸公園科学技術館  
サイエンスホール  
・第5回総会 9月29日(土)11:30~12:30  
・公開シンポジウム『河川の自然復元』

英国バーミンガム大学ペッツ教授他

9月29日(土)13:30~16:30

・第5回研究発表会

9月29日(土)16:30~30日(日)17:00

□第5回研究発表会の発表論文の募集を開始します。

—研究発表申込記入事項(形式自由A4版1枚)—

A発表者名・連名者名、所属、会員番号

B研究発表題目

C連絡先(〒、住所、TEL、FAX、E-mail)

D研究発表概要(200字程度)

E「ポスター発表」か「口頭発表」

Fキーワード(5つ程度)

[研究発表申込受付期限 : 8月20日]

[研究発表要旨原稿提出期限 : 9月10日]

[一般参加申込受付期限 : 9月21日]

[公開シンポ参加申込(無料)期限: 9月21日]

2. 現地ワークショップin矢作川「鮎のいる川をとりもどしたい！」

開催月日: 2001年10月20日(土)

会場: 豊田市産業文化センター

— 矢作川現地視察と報告講演討議

3. 応用生態工学現地ワークショップin松山「川と泉の生きものたち—重信川流域」

開催月日: 2001年11月30日(金)

会場: 愛媛大学工学部18番教室

— 重信川流域の泉の現地視察と

報告講演討議

4. 奨励研究募集開始!

2001年度の奨励研究の募集を開始します。

[奨励研究募集締切: 8月31日]

5. 会誌「応用生態工学」3巻1号(特集: 日本の沿岸環境保全)は、残部が無くなったため増刷しました。1冊3,000円です。是非御購読を!

6. 実行委員募集!

札幌・東京・名古屋・大阪・福岡・松山等各地域在住の方々は、ぜひ実行委員として参加お願いします。事務局に連絡を!

## 1. 第15回幹事会・第14回理事会報告

応用生態工学研究会では、2001年6月15日(金)に第15回幹事会、翌16日(土)には第14回理事会を開催しました。以下、主要事項の報告を行います。

### 第15回幹事会

開催月日：2001年6月15日(金) 14:00～17:00

会場：麴町会議室

出席：谷田、北村、島谷、竹門、古川、  
(事務局熊野)

### 第14回理事会

開催月日：2001年6月16日(土) 10:00～12:30

会場：都市センターホテル606会議室

出席：川那部、橋川、廣瀬、石川、小倉、  
楠田、國井、小林、玉井、辻本、半田  
鷺谷、谷田、(事務局熊野)

#### 1) 報告事項

##### (1) 会員入会状況

(6月13日現在) 正(学生)会員 1,027名、  
賛助会員 58法人

初めて1,000名を越えました。

(2) 平成12年度決算及び平成13年度予算案報告  
両報告は、事務局より行われ理事会で大枠は承認されましたが、

- ①大会費用の詳細説明
- ②会誌編集費用の詳細(別刷りを含む)説明
- ③幹事会費・理事会費の地域基礎講座等参加費の別計上

等の加筆修正が指示されました。これらは、後日報告します。

#### 2) 5ヶ年計画中間総括

1999年度(平成11年度)立案された「応用生態工学研究会5ヶ年計画」の中間総括の検討がおこなわれました。以下、関連委員会毎に報告します。

#### [1] 会誌編集委員会

##### (1) 年発行回数の増加検討

4巻1号では、特集を組まないにもかかわらず100ページ程度であり、4巻2号については、長良川河口堰モニタリング評価特集の80ページを合わせ180ページ程度が見込まれる。よって、現在巻(年)2号の体制を巻3号さらに目標である巻4号というように発行回数を増やす検討に入っている。

発行回数の増加のためには、会費の改訂を含め関係事項の検討が必要である。

##### (2) 「事例研究」の投稿促進

報文に「事例研究case study」を新設した(2001年4月6日発行ニュースレターNo.14で報告)が、この主旨のもと実務者(行政、

コンサルタント等の技術者)からの投稿を促進する必要がある。

#### [2] 普及委員会

(1) 1998年度以来、年4回のペースで、基礎講座、現地見学会等を開催してきた。

(2) 各地域で「研究実行委員会」が組織され、研究会組織の中核を形成している。

2001年度より、その名称を以下のようにした。

「応用生態工学研究会札幌」

「応用生態工学研究会東京」

「応用生態工学研究会名古屋」

「応用生態工学研究会大阪」

「応用生態工学研究会福岡」

また、地域の独自性・主体性をより尊重することが拡大理事会(2001年1月27日)で確認されている。

今後、四国「松山」(2001年度)、北陸(2002年度)、中国、甲信越等に展開し、地域活動の充実を図る。

(3) 各地域での独自性・主体性を具体的に推進するためには、会計においてある程度の自由裁量を持つことが必要であることから、札幌・大阪・福岡の3地域に銀行口座を開設した。

(4) 講座・現地セミナー等の開催費用は、参加費等収入＝支出という年会費からは独立採算性を原則としており、年度毎に過去3ヶ年はそれを達成できた。今後とも、この方針は継続するものとする。各地域では、地域ごとの独立採算性を原則とする。

(5) 基礎講座や現地見学会等の開催は、普及委員会所管であるが、交流委員会や各地域での主体的活動によっても計画・実行されて来ている。今後とも、各委員会や各地域での活動と積極的に連携してゆく。

#### [3] 交流委員会

(1) 海外派遣研究員：2001年度は、募集当初、研究会として推薦できる海外学会等の情報がなかった。今後の反省として、役員・関係者の協力を得て、早めに海外の学会・会議等の情報を得て、会員に推薦する。

また、この海外派遣については、今後とも「応用生態工学」にとって有意義なものに限るものであり、予算消化のための派遣は行わない。

なお、派遣助成金の配布方法については、

①総額30万円以内とする。

②渡航費(国際航空運賃、往復)を対象とする。

③一人当たりの渡航費は必要最低分(エコミ割引)とし、なるべく多くの人がこの助成の恩恵を受けられるようにする。

とした。今後の助成金については、派遣先や申請者・適格者数など様々な条件が出てくる可能性がある。上記を基本としつつも、交流委員会では臨機応変に対応するものとする。

- (2) 海外からの招聘の担当について：2000年度には、米国のKarr教授を招き公開シンポジウムを開催し、2001年度以降もその活動が継続される予定である。この分野は、基本的には、「交流委員会」が担当すべき分野であるが、取り上げるテーマや招聘する海外の対象者との人的つながりが実施に当たって、大変重要な要素となる。よって、2001年度に実施されるように、各回毎に、実行担当者組織を造り運営すべきである。
- (3) その他、交流委員会としては、学術交流、研究者・技術者・行政者の交流、市民との交流、国際的交流、を漸次積極的に進めるものである。「市民との交流」については今後具体的に推進する重要事項であり、新たに委員会を設けて検討する(後述)。

#### [4] 研究開発委員会

- (1) 研究開発委員会の内村 好委員((株)建設技術研究所)から村田和夫氏(同社)に交替する。
- (2) 奨励研究については、第1年度である1999年度助成者3名が、各々第4回研究発表会での研究発表を行い、成果を得た。これからは、会誌への投稿を視野に入れつつその運営を図って行く。
- (4) 受託事業については、行政等外部からの潜在的要望は高いものと考えられる。今後の対応を十分行う。
- (5) 理事会では、この「研究開発委員会」という名称は、受託事業の実現時等に改名(例えば「調査・研究委員会」)を検討すべき、との意見があった。

#### [5] 大会開催運営委員会

(後述「各委員会について」参照)

#### [6] その他

5ヶ年計画ではその他、

- ①5年以内には日本学術会議登録団体に申請する。
- ②研究会活動の各場面で、広報活動を行う。
- ③各委員会相互の連携を図る。

が示されており、漸次進めている。

特に、日本学術会議登録については、平成14

年度に申請を行なう。

なお、幹事会・理事会では、2001年度(平成13年度)の事業計画の具体的事項(各地域講座・勉強会・現地ワークショップ開催、第5回大会開催、公開シンポジウム開催、奨励研究募集等)も審議され承認された。その内容は、このニュースレターNo.15の別項に掲載した。

#### 3) 各委員会について

- (1) 1999年6月に発足した各委員会は、2001年度2ヶ年の任期を迎えるが、そのまま2001年9月29日の第5回総会まで任期を延長する。
- (2) 第5回総会の新役員人事を待って、各委員会の委員長及び委員の人選を行うが、
- ①5ヶ年計画遂行のための継続性を確保する、
  - ②理事会及び幹事会との連携性を確保する、ものとする。
- (3) 交流委員会は、担う内容が次々増大すること、及び「市民との交流」については、当研究会がどのように係わるところができるか、具体的検討を行う必要があることから、新たに「パートナーシップ委員会(仮称)」を設置する。

- (4) 「大会開催運営委員会」は「大会運営委員会」と改名し、委員長は幹事長とし、委員としては理事等役員、事務局長等で構成する。この大会運営委員会の下に、毎年「大会実行委員会」を設置し大会を開催運営する。
- (5) 海外からの招聘者を交えての公開シンポジウム開催については、2000年度より5ヶ年の計画を立てているが、幹事長を委員長とする大会運営委員会で経年的に企画運営にあたる。
- (6) 学術研究団体登録申請(平成14年5月予定)会誌の季刊化、事務局体制、会費の改正、法人化、受託事業、研究会組織の改正、及びそれらに伴う規約の改正など、今後の研究会の在り方や、進め方について十分な検討を事前に行う必要がある。このため、「将来構想委員会(仮称)」を新たに設置する。

以上の委員長及び委員を2001年9月29日の第5回総会後に、会長が委嘱する。

#### 4) 次期役員候補者選考委員会報告

幹事会及び理事会に先だって、6月15日(金)第2回「次期役員候補者選考委員会」(麴町会議室)が開催された。川那部委員長より、委員会で選考した「次期役員候補者(案)」が理事会に報告され了承された。

#### 5) 事務局体制について

第5回総会時に開催される理事会において、

次期(2002年4月1日以後)事務局長候補者を事務局次長に任命する。

を開催しました。

発表者、コメンテーター、研究会役員、一般参加者及び実行委員を合わせて総計89名に参加いただきました。

6本の発表論文・プログラムを紹介するとともに、当研究会理事である國井秀伸氏(島根大学)の印象記を掲載し報告とします。

## 2. 「生態学リサーチマネジメントをアシストする勉強会(第1回)」開催報告

2001年6月16日(土)～17日(日)、東京の都市センターホテル606会議室において、「生態学リサーチマネジメントをアシストする勉強会(第1回)」

### 「生態学リサーチマネジメントをアシストする勉強会(第1回)」

コメンテーター:

- 川那部浩哉(京都大学名誉教授)
- 橋川次郎(クイーンズランド大学名誉教授)
- 石川忠晴(東京工業大学教授)
- 嶋田正和(東京大学助教授)
- 粕谷英一(九州大学助教授)
- 島谷幸宏(独立行政法人土木研究所上席研究員)

竹門康弘(大阪府立大学助教授)

司会・進行(コメンテーターを兼ねる):

鷺谷いづみ(東京大学教授)

プログラム:

6月16日(土)

- 12:30 会場受付開始
- 13:00 開会/川那部浩哉会長講演
- 14:00 発表1(20分発表、40分討議、10分休憩)

「底生動物からみた多摩・山地河川の長期的変化に関する研究(その1)」  
—河川改修や洪水の攪乱と底生動物—

- 土屋十囀(前橋工科大学)
- 風間真理(東京都)
- 平井正風(三洋テクノマリン株)

「同上(その2)」

—河床環境の変化と底生動物—  
平井正風、土屋十囀、風間真理

- 15:10 発表2「多自然型浚渫工法の導入について～浚渫工事における環境創造への取組み事例～」  
安田肇(京都府土木建築部河川課)  
古川整治(株)水建設コンサルタント)  
厨子和典(同上)

杉山彰敏(同上)

- 16:20 発表3「琵琶湖の湖岸環境に関する研究Ⅱ.沈水植物の群落面積と季節変化」

大村朋広(水資源開発公団琵琶湖開発総合管理所)

福士富之信(水資源開発公団)

林 日出喜(同琵琶湖開発総合管理所)

堀家健司(国土環境株)

- 17:30 発表4「多自然型川づくり事後評価について—中戸蔦水制工事—」

財津知亨(国土交通省北海道開発局建設部河川計画課)

村椿俊幸(同上)

粕谷和久(同帯広開発建設部治水課)

倉田亜以土(アークコーポレーション株)

18:30(1日目終了)

6月17日(日)

- 9:00 発表5「ダム事業によるイヌワシ、クマタカへの影響に関する解析手法の検討」

尾澤卓思(財)ダム水源地環境整備センター)

松本達郎(同上)

田悟和巳(国土環境株)

- 10:10 発表6「無土壌岩盤地における法面処理の変遷について」

今本博臣(水資源開発公団環境室)

後藤浩一(同試験研究所)

白井明夫(国土環境株)

- 11:20 橋川次郎副会長講評及び講演

12:20 閉会

## 勉強会印象記

理事 國井 秀伸 (島根大学)

コンサルタント技術者が仕事の成果の公表を通じて調査能力を向上することを期待して、会誌に「事例研究」という新しい報文種類が加えられたことは記憶に新しい(ニュースレターNo. 14)。これと期を一にして、普及委員会の企画した「生態学リサーチマネージメントをアシストする勉強会」が行われた。この勉強会の案内文には、「…環境影響評価、自然環境の保全・復元などの事業に伴い、生態学をベースとした自然環境の評価、保全・復元計画立案、モニタリング等に係わる調査や研究が実施される機会が多くなってきました。…しかしこれまで、そのような調査・研究の成果は報告書等としてまとめられるだけで、専門的、科学的な意味でのピア・レビューを受ける機会や公開性が十分に保障されていませんでした。また、得られた知見がその場かぎりのものとなり、関連する応用科学分野における情報蓄積への寄与が難しいという問題点もありました。そのような現状を打開するためには、調査・研究成果がピア・レビューを受けた上で関連学会や研究会の研究誌に論文や報告として掲載され、広く公開されるようになることが望まれます。…」と書かれていた。私自身もこれまで、コンサルタント会社や自治体が業務として行っている数々の調査と研究、莫大な時間と労力を費やして得たその結果の多くが、科学的な成果としては活用されずに眠っていると感じていたし、何とか生かす方策はないものかと考えていたところであった。それで、この勉強会が報告書を論文に変身させるためにどのようなアドバイスを行うのか、興味を持って参加した。

当日は、本ニュースレターの記事にある通り、2日間にわたって6つの発表が行われた。資料として配布された発表論文集は7つの論文全73ページからなる立派なもので、どの論文もそのまま会誌に掲載してもおかしくない体裁を整えたものであった。さて、勉強会の様子である。それぞれの発表に対して十分な討論ができるよう、発表者の持ち時間は1時間とたっぷりあってあったものの、少なくとも私にとっては、今回の勉強会は会場全体で討議するという所期の目的を達したとは言い難い印象を受けた。これは、今回が勉強会の第1回目であり、また「事例研究」の事例がまだ無いため、経験不足と戸惑いから生じたものと思われる。先ほどの案内文は次のように続く。「そのような機運をつくるために普及委員会(委員長鷺谷いづみ)では、調査・研究計画のたて方や関連学会誌への掲載に値する研究の進め方・まとめ方などを、調査・研究事例の発表にもとづき、コメンテータ(応用生態工学および生態学

の第一線で活躍中の研究者)からの個別のアドバイスを加えた上で、会場全体で討議します。」しかし、実際にはフロアから若干の質問があったものの、ほとんどはコメンテータと発表者とのやり取りに終始していたし、そのやりとりも発表の「内容」に関するものが多く、私がこの勉強会の目的と考え、また期待もしていた「まとめ方」に対する助言はそれほど多くはなかった(唯一この希望に当たっていたのが「応用生態工学」の竹門編集委員長のOHPを用いてのわかりやすい講評であった)。のっけからスペクトル分析の適用の意義についての高度な議論が展開されたことも、その後の会場の雰囲気大きく影響したかも知れない。

参加者も混乱していたのではなかったか。コメンテータには発表資料が事前に配られていたようなので、当日はそれぞれのコメンテータが各論文にどのようなコメントをしたのかを参加者に資料として配り、それを基に会場全体で討議するというやり方がよかったと思われる。12,000円という決して安くは無参加費(非会員は15,000円)を払って会場を訪れた方々は、今回の勉強会についてどのような印象を持たれただろうか。「発表者」にとっては有意義な勉強会であったものの、その他大勢の勉強をしに来た「参加者」にとっては不満の残る勉強会ではなかったか。アンケートを取り、今後の勉強会のあり方には是非生かしてほしい。今回の発表のうちいくつか(あるいはすべて)が会誌に掲載され、今後の「事例研究」の基準となるのは間違いない。この勉強会の次があるかは未定とのアナウンスが会場であったが、古川氏らの提言(応用生態工学3巻1号)を生かす方向で、是非とも2回、3回と続け、研究会の更なる活性化を図ってほしい。

0

・会場から意見を述べる國井理事

1

・「生態学リサーチマネジメントをアシストする勉強会（第1回）」の司会進行とコメントーターを務める鷺谷理事

2

・冒頭講演する川那部会長

3

・発表する土屋氏（前橋工科大学）

4

・発表する安田氏（京都府）

5

・最後の発表後、討議に応じる今本氏等

6

・コメントータ・島谷氏が意見を述べる

7

・各論文に対してOHPを示し“会誌編集委員長”として意見を述べるコメントータ・竹門氏

8

・最後に講評する橘川副会長

### 3. 会誌「応用生態工学」3巻1号増刷お知らせ 特集担当編集委員 清野聡子

近年、海岸や沿岸をめぐる法制度が相次いで改正され、海の環境保全の具体的な知見や技術への関心が高まってきた。時機を得て、沿岸環境保全特集を組んだ3巻1号を増刷が行われた。

本年冬の有明海でのノリ不作問題が社会問題化したことから、多くの対策が海域に対して行われることとなったが、それらの学問的・技術的背景や、研究の現状については研究分野が多岐にわたり相互交流が少なかつたため通観することは困難である。特に海岸では、古来より水産的利用を目的とした環境改善などの人為的変更改が加えられており、現在も生態系保全や水産業振興のためにさまざまな技術が事業

として投入されている。これらを応用生態工学的見地から再考し整理し、沿岸における環境保全のパースペクティブを議論する必要性が増大している。

沿岸環境保全研究には様々な切り口がある。本特集では、特に「海岸における応用生態工学の展望」として、生態学と土木工学の科学研究・技術開発の現状について、研究と社会システムとの連関や展開に注目した異色の特集を組んだ。海岸事業と生態系保全の相克問題、海岸の法制度と工学的対策の現状、持続的水産業と漁港事業、水産生物の増殖を目的とした生態工学である水産工学のビジョン、海岸環境保全における地域研究機関の役割、市民参加やアマチュアリズムの生態学研究での可能性などを取り上げた。

応用生態工学研究会誌

「応用生態工学 Ecology and Civil Engineering」  
3巻1号(2000)

日本の沿岸環境保全 特集

「日本の沿岸環境保全における応用生態工学の展望—特に海岸の現状と問題点—」(序文)

清野聡子(東京大学大学院総合文化研究科)

「カブトガニ産卵地の地形特性と孵化幼生の分散観測—希少生物生息地のミティゲーション計画のために—」(原著)

清野聡子(東京大学大学院総合文化研究科)

宇多高明(建設省土木研究所河川部)

土屋康文(総合ビデオサウンド)

前田耕作(東京大学院総合文化研究科)

三波俊郎(海岸研究室(有))

「水産工学は海岸生態系保全に何ができるか」  
(総説)

谷野賢二(北海道東海大学工学部海洋環境工学科)

「生態系保全の観点から見た海岸事業の現状と今後の展開」(総説)

鳥居謙一・加藤史訓・宇多高明(建設省土木研究所河川部)

「漁港漁村整備における生態系保全の考え方」  
(総説)

長野 章(水産庁漁港部)

「海岸生態系研究におけるアマチュアリズムと保全活動—希少貝類を例として—」(総説)

山下博由(オカミミガイ類保護研究会)

「新しい海岸制度のスタート」(意見)

岸田弘之(建設省河川局海岸室)

「海岸における植物生態学研究と環境保全—ナホトカ号重油流出被害の海岸植生モニタリングを例として—」(意見)

古池 博(石川県地域植物研究会)

「地域発の沿岸生態系復元研究を」(意見)

工藤孝浩(神奈川県水産総合研究所)

\*\*\*\*\*

原著論文

「河川と水辺の国勢調査(ダム湖版)でのセンサス方式の評価」(英文)

「近畿地方のダム湖における水鳥群集と環境要因の関係:ダム管理との関連」(英文)

総 説

「河川環境におけるカニ類の分布様式と生態—生態系における役割と現状—」

短 報

「群馬県押野川における落差工の多自然型魚道への改善とヤマメの放流実験」

意 見

「実務的な発表(論文)を活発化するための一提案」

(平成12年7月21日発行、平成13年5月21日第2刷発行)  
会誌購入(1冊3,000円)の問い合わせ及び申込みは事務局までお願いします。

上記3巻1号の他、創刊号よりバックナンバーがそろっております(各1冊3,000円)。

創刊号(1巻1号):1998年11月30日発行

2巻1号:1999年5月31日発行

特集「河川の自然復元」

2巻2号:1999年11月19日発行

特集「ダム構造物の影響」

3巻1号:2000年7月21日発行

特集「日本の沿岸環境保全」

3巻2号:2000年12月21日発行

特集「魚道の機能評価」

#### 4. 第5回大会開催案内

2001年(平成13年)9月29日(土)～30日(日)、第5回大会(第5回総会・第5回研究発表会・公開シンポジウム)を開催します。

第5回総会は9月29日開催します。今回は、1997年10月発足以来丸4年(2期)経過しますので、役員の大規模な改選を行います。併せて必要な規約の改正を予定しております。

総会に合わせて開催する第5回研究発表会への講演の募集受付を始めます。研究発表会では、研究成

果と共に、現場で抱えている課題や問題提起、プロジェクト提案そして自由な発言の場です。会員の皆様の研究発表参加をお待ちしております。

9月29日には、英国バーミンガム大学ジェフリーE.ペッツ教授(準学長)をお招きして、日本の研究者・実務者と議論していただく公開シンポジウム

『河川の自然復元』を開催します。これは、応用生態工学研究会が国際交流の一環として第2回目の開催であり、河川整備基金の助成を受けて一般にも公開します。

#### 【応用生態工学研究会第5回大会】

2001年9月29日(土)～30日(日)

・第5回総会:

9月29日(土) 11:30～12:30

・公開シンポジウム:『河川の自然復元』

9月29日(土) 13:30～16:30

・第5回研究発表会:

9月29日(土) 16:30～18:30「ポスター発表」

9月30日(日) 9:00～17:00「口頭発表」

【会場】科学技術館(サイエンスホール、定員410名)

〒102-0091 東京都千代田区北の丸公園2-1 TEL.03-3212-3939

(地下鉄「九段下」駅下車徒歩7分、東西線・半蔵門線・都営新宿線)

——上記時間スケジュールは、変更しますのでお気付け下さい——

#### (1) スケジュール(詳細は後日)

大会当日及び関連会議を含めて以下に全体のスケジュールを示します。

9月27日(木) 18:00～

第8回会誌編集委員会(麹町会議室)

9月28日(金) 19:00～

第16回幹事会(麹町会議室)

9月29日(土) 9:00～

第15回理事会(科学技術館第1会議室)

9月29日(土) ——1日目——

11:00 (ホール開場、受付開始)

11:30 ・第5回総会

総会議長選出

議事(会長挨拶、平成12年度事業報告・決算報告・監査報告、規約改正、役員改選、平成13年度事業計画・予算、その他)

注)総会は規約14条により正会員で構成されます。

12:30 総会閉会

(総会後直ちに幹事会・理事会を開催し、主要手続き事項の審議を行います。)

13:30 ・公開シンポジウム『河川の自然復元』(無料)

〈英国バーミンガム大学ペッツ教授講演等〉

16:30 ・第5回研究発表会「ポスター発表」

18:30 ・懇親会(同館内レストラン)

20:00 (1日目終了)

9月30日(日) ——2日目——

9:00 ・第5回研究発表会「口頭発表」

17:00 (2日目終了)

#### (2) 研究発表募集

第5回研究発表会では、応用生態工学に関わる研究報告、研究プロジェクト提案などの一般研究発表の受付を開始します。発表方法は、「ポスター発表」と「口頭発表」とします。下記要領に基づき応募して下さい。

##### 〔1〕発表内容

研究発表に応募できる講演内容は、応用生態工学に関する調査報告、研究報告、事例報告、研究プロジェクト提案、および自由課題です。今回公開シンポジウムで「河川の自然復元」をテーマとすることから、関連した内容の発表を歓迎します。

##### 〔2〕発表方法

過去4回は「口頭発表」だけでしたが、今回からはこれに「ポスター発表」を加えます。応募に当たっては、「口頭発表」か「ポスター発表」いずれを希望するか明記して下さい。応募状況に応じて、実行委員会で振り分けさせていただきます。

なお、ポスター発表の場合は、主会場(ホール)で3分程度の紹介発表をしていただき、その後ポスター発表会場(会議室)で発表してい



ただく予定です。

〔3〕発表時間

口頭発表の発表時間は、1 課題当たり15分（発表12分、討論3分）程度で、申込数により決定します。

〔4〕研究発表申込（8月20日まで）

研究発表を申込みされる方は、A4版用紙1枚、形式自由、ただし下記事項を記入の上、事務局まで郵便、FAX、E-mailで送り下さい。後日事務局より受付確認および「口頭発表」か「ポスター発表」の連絡をします。

——申込記入事項——（A4版1枚）

- ①発表者名および連名者名と各々の所属（会員番号）
- ②研究発表題目
- ③連絡先（〒、住所、氏名、TEL、FAX、E-mail）
- ④研究発表概要（和文200字程度）
- ⑤「ポスター発表」「口頭発表」いずれか希望するもの
- ⑥キーワード（対象地域・対象生物を含め5つ程度）

〔対象地域の例〕河川全域、河川上流（＝溪流）、河川中流、河川下流（河口含む）、湖沼、海域、森林、水田、畑地、道路、都市、農村、等

〔対象生物の例〕生態系全体、陸上植物、陸上動物、水生植物、底生動物、鳥類、魚類、等

〔5〕研究発表要旨原稿の提出（9月10日まで）

研究発表者（口頭発表及びポスター発表いづれも同じ）は、研究発表要旨原稿（A4版4枚以内）を期日までに事務局へ提出。原稿は下記の要領に従って作成。

——研究発表要旨原稿作成要領——

- ・A4版縦、4枚以内
- ・左右15mm以上、上下18mm以上余白
- ・横一段組みにて中央に「講演題目」を和文にて、14ポイント程度の文字、2行で記入
- ・題目の下1行空け右寄せで「講演者名、連名者名、各々の所属」を、12ポイント程度の文字で記入
- ・本文は、10.5ポイント・明朝
- ・原稿はそのまま印刷できるようプリントし、図表等を張り付けたものとそのコピーを1部提出。印刷は白黒。

（ポスター発表については、作成要領および関連スケジュールを後日連絡します）

〔6〕研究発表者資格

研究発表者は、応用生態工学研究会の正会員、学生会員、および賛助会員法人に所属する個人。なお、連名者については会員・非会員を問いません。但し、研究発表者が学生の場合、連名者に会員がいれば可とします。

（3）参加料

一般参加者および研究発表者ともに下記同額の参加料とします。

●研究発表会参加料：

|          |         |
|----------|---------|
| 正会員・賛助会員 | 6,000円  |
| 学生会員     | 3,000円  |
| 非会員      | 10,000円 |
| 学生非会員    | 4,000円  |

●懇親会参加料（一律）：3,000円

注1）9月29日総会のみ出席する正会員は、無料。

注2）9月29日公開シンポジウムは、河川整備基金の助成を受けており無料。

注3）研究発表会参加料には、当日配布する講演集費用を含む。但し、講演集のみ入手希望の会員には、2,000円で販売。

注4）合計参加料は、参加者名を明記の上、下記指定口座に振り込む。

注5）交通手段及び宿泊関係は各自で手配。

【受付期限】

1. 第5回研究発表会・研究発表申込  
受付期限：2001年8月20日（月）消印有効
2. 第5回研究発表会・研究発表要旨原稿  
提出期限：2001年9月10日（月）消印有効
3. 第5回総会・研究発表会一般参加申込  
受付期限：2001年9月21日（金）消印有効
4. 公開シンポジウム（9/29）参加申込（無料）  
受付期限：2001年9月21日（金）消印有効  
（8月発行予定のニュースレターNo.16で詳細なスケジュール等をお知らせするとともに、一般参加申込み用紙を同封の上お送りします）

【申込み及び問い合わせ先】

応用生態工学研究会事務局  
〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5第7麹町ビル226号室  
TEL.03-5216-8401 FAX.03-5216-8520  
E-mail：see@blue.ocn.ne.jp

【指定口座】郵便振替口座

（口座名義）応用生態工学研究会  
（口座番号）00140-7-404275

—注意—いままで指定口座として利用していた「あさひ銀行麹町支店」は、平成13年8月20日以降、支店統合につき廃止されます。新しい銀行口座を8月以降に開設しますので、後日お知らせいたします。

## 5. 奨励研究募集

応用生態工学研究会では、1999年度より奨励研究を実施してきました。

1999年度（平成11年度）

4名応募—3名採択（合計90万円助成）

2000年度（平成12年度）

5名応募—2名採択（合計68万円助成）

2001年度（平成13年度）については、6月16日開催された第14回理事会において、その継続実施が決められましたので、ここに募集を開始します。会員の皆様には、下記要領に基づき、ふるって応募いただきますようお願い申し上げます。

——奨励研究募集要領——

- 1) 課題：応用生態工学に係わる研究・提案
- 2) 対象者：会員（正・学生会員及び賛助会員）の若手研究者・実務者（自ら研究計画を立案しそれを実行できる会員）の個人あるいはグループ
- 3) 費用：1件30万程度（3件程度、研究会より支給）
- 4) スケジュール：

2001年7月 ・ニュースレターNo.15で募集開始  
8月31日 ・募集締め切り、[奨励研究申請書]提出  
9月末 ・採択決定（研究開発委員会で審査、理事会で決定）  
10月1日～2002年8月31日を研究作業期間とする。  
2002年8月31日 ・研究報告概要及び会計報告提出。  
2003年4月30日 ・研究報告書提出。

- 5) 奨励研究申請書：書式自由。但し下記事項必ず記入。A4版計2枚程度で提出。

- ①会員番号、氏名、所属、連絡先（〒、住所、TEL、FAX、E-mail）。グループの場合は、参加者全氏名、所属および代表者名を明示。
- ②予算書（備品、消耗品、旅費などを区別して、研究計画との関連が分かり易いように書く）
- ③研究計画書 [A4一枚程度]（研究課題、目的、方法、成果の見通し、応用生態工学への貢献など）

## 6. 地域だより

### 1) 札幌だより

応用生態工学研究会札幌は平成13年度を初年度とした3ヵ年計画のプロジェクトを以下の内容で

始動させました。

プロジェクト名：フゴッペプロジェクト

テーマ：“多自然型川づくり”の仮説・検証・評価に至る手法をさぐる

対象河川：2級河川フゴッペ川水系フゴッペ川（余市町）

流域面積20.3km<sup>2</sup>、流路延長12.1km

河床勾配1/200～1/40、

水面幅5～2m前後（現況）

河川管理者：北海道小樽土木現業所

目的：河川計画に活かす調査計画の手法をフゴッペ川で試行し、その結果を活かしたフゴッペ川河川改修計画の提案を行う。

内容：平成13年度は流域全般を知る目的で、粗い河川環境情報図を作成。

平成14年度は情報図から河川計画に活かす科学的手法の調査ポイントを絞込み調査を実施。

平成15年度は科学的手法の精査、分析と考察を加え、河川計画の提案へ。

参加者：北海道内のどなたでも自由参加。

希望者は下記の連絡先に申し出て下さい。

その場合<ニュースレターを見て「フゴッペプロジェクト」へ参加します>と一言お書き添えください。

参加費：無料、ただし持ち出し有り・手弁当で行っています。

通信：通信は経費・簡便性からEメールで行います。ご了承ください。

アドバイザー：7名の大学や行政の研究者

連絡先：プロジェクト調整雑務担当/松本伸之  
Eメール；brew@netfarm.ne.jp

このプロジェクトは順応的（実験的）管理を意識したものです。河川改修のような生態系への人為作用を慎重に配慮するとは、どういうことか。保全目標をもった河道計画を仮説検証しながら進めるには、具体的にどのような流れで進めたら良いのか。このような疑問を生態学と工学の実務者が集まって集団で協働試行しようとするワークショップです。

現在30名以上のメンバーが集まっています。積極調査参加、模様眺め参加、情報入手のみ参加、とメンバーの内訳は様々です。途中参加・途中離脱もかまいません。興味のある方はご連絡ください。

応用生態工学研究会札幌 事務担当：

岩瀬晴夫（㈱北海道技術コンサルタント）

## 2) 交流委員会・名古屋だより

交流委員会(辻本委員長)で開催を検討していた矢作川の現地ワークショップについては、2001年5月14日(月)に愛知県豊田市矢作川研究所において関係者の準備会議が開催され、その後の調整等によって、以下の企画案が現時点で作成されています。報告発表者、時間スケジュール、参加費用等の詳細は今後さらに検討し再度連絡しますが、実施日および主な内容はこの企画案で実施されます。

参加希望者の受付を開始します。および、企画検討の段階から実行委員として参加される方を募集しております。会員・非会員どなたでも参加出来ます。東京の事務局まで申込み下さい(電話、FAX、E-mail何でも結構です)。

名称：現地ワークショップin矢作川 鮎のいる川をとりもどしたい！(仮題)

開催月日：2001年10月20日(土) 9:00-17:30

会場：豊田市産業文化センター

開催主旨：愛知県を流れる矢作川は、古くから地域の水利に大きく貢献するとともにその姿を変貌させてきました。とくに上流から7つものダムを抱える現在は、河川流量の減少、氾濫の機会の減少と規模の縮小、土砂の流下阻害による河床の低下や固定化、アユをはじめとする魚類の減少やカワシオグサのような大型糸状緑藻の繁茂といった、河相や河川生態系のアンバランスが見られます。一方で矢作川では流域市民による河川保護運動が進められてきたこととともに、豊田市矢作川研究所を中心に、生物学、工学、社会学の各分野の研究者が行政・市民・民間企業と協力し、河川生態系の現状を把握して、環境を改善するための取り組みを始めています。

今回のワークショップでは、矢作川でアユに焦点を当てながら、河川の物理基盤、水質、動植物の生活がどのように関連しているかについて、この地の研究成果を紹介するとともに、ダムのある河川における河川生態系の変化とそれを自然に復元する可能性について議論したいと考えています。

プログラム(案)：

8:50 会場受付開始

9:10 開会

9:15-10:15 矢作川の現状と問題点(総論)  
(25分発表、5分質疑応答)

「生物からみた矢作川」洲崎燈子(豊田市矢作川研究所)

「矢作川の河道特性」辻本哲郎(名古屋大学)

10:20-14:30 矢作川視察(バスに乗って移動)  
古巣見学/砂利投入実験/大型糸状藻類剥離実験/人工基盤による大型糸状藻モニタリング/葵大橋付近見学  
——以上の現地見学内容はまだ検討中です。昼食については、是非アユの試食を実現したいと考えてます。

14:20 会場到着

14:30-17:30 発表及び議論

司会・進行(森 誠一)

——現地見学を踏まえて会場では、いくつかの研究発表をした後に参加者全員で「鮎のいる川をとりもどしたい！」をテーマに議論をしたいと考えてます。

報告発表予定者：(検討中)

北村忠紀(名古屋大学)、田中 蕃(豊田市矢作川研究所)、山本敏哉(同左)、内田朝子(同左)、森 誠一(岐阜経済大学)、内田臣一(愛知工業大学)、その他

なお、このワークショップは、学術交流、研究・行政・民間技術者等の交流をめざすものであり、下記4団体の共催を予定しています。

- ① 応用生態工学研究会
- ② 土木学会水理委員会河川部会
- ③ 溪畔林研究会
- ④ 豊田市矢作川研究所

## 3) 福岡だより

福岡では、平成13年度の基礎講座として、「数理生態学への誘いー保全生態への適用を目指してー」(主催：応用生態工学研究会福岡、共催：国際生態系モデリング学会日本支部)を開講しました。第1、2回の講座が開かれましたので、その模様を報告します。

第1回 数理生態学で何ができるか

日時：平成13年5月26日(土) 10:00~17:00

場所：九州大学国際ホール

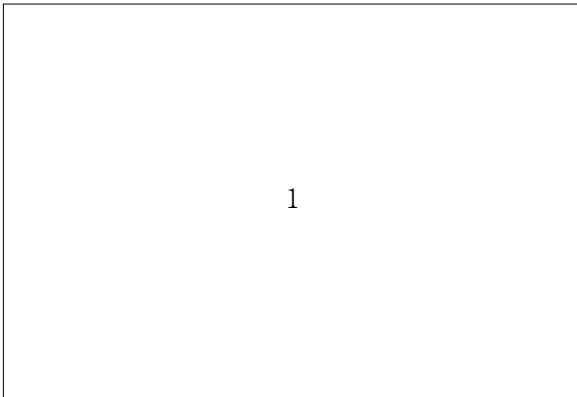
講師：巖佐庸教授(九州大学大学院理学研究院)

数理生態の総論を講義していただくのには、この先生しかいないという巖佐先生をお招きして開講されました。当日は、事務局を含めて67名の参加者がありました。

講義内容は、基礎的なロジスティック方程式を用いた1種個体群の動態モデルから始まり、ロトカ・ボルテラ式、拡散方程式、格子モデル等を用いた解析例、さらにはカオス結合モデルや絶滅時間の推定法におよび、非常に内容の濃いものとなりました。

受講された方は、数式が次々と現れる講義内容に多少とまどいつつも、数理生態学とはどのような解

析法なのかというイメージをもっていただけたと思います。



・巖佐先生：大変熱のこもった講座でした

### 第2回 数理生態学の適用性—魚類

日時：平成13年6月23日(土) 10:00~16:00

場所：九州大学工学部本館10番教室

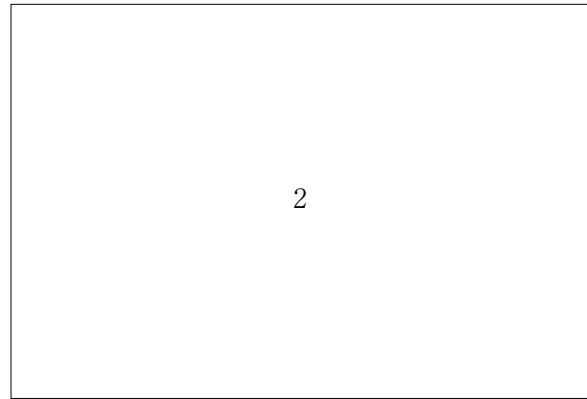
講師：原田泰志助教授(三重大学生物資源学部)

第2回目は、魚類を扱った数理生態学を原田先生に御講義いただきました。当日は激しい雨の中にも関わらず、59名の参加者がありました。

講義内容は、なぜ数理を使う必要があるのかから始まりました。次に一般的なロジスティック式の説明に続き、実際にモデルが使われている例として、伊勢湾のイカナゴの資源管理のビデオが放映されました。講義後半には、堰建設により上下流の個体群が分断された魚類について、遺伝的に劣化していく条件を、モデルを用いて検証した例や、外来種を駆除する方法を数理生態学で検討した例などが紹介されました。またadaptive management(順応的管理)の必要性を訴えられ、その際における数理生態学の有効性についても時間を割いて説明されました。

第2回の講座では、実際に管理に使われているモデルを紹介していただいたことにより、より具体的なイメージをもっていただけたと思います。

第2回目を終わっての事務局の感想ですが、やはり生物関連の専門の方は、数式に対して苦手意識が強く、そのハードルをなかなか越えられないという感じがしています。かえって土木分野の方のほうが、講義内容に関して抵抗がなく、スムーズに理解しているような感さえあります。巖佐先生、原田先生とも言われていることですが、adaptive management(順応的管理)の必要性は近年になり高くなる一方です。もちろん基本的な分類や生態の知識があつてのものですが、そろそろ数理モデルを使った管理のための生物調査がもっと増えてきてもよいのかもしれない。そういう意味からすると、生物分野の方のための数学講座みたいなものもあつても良いかなと思います。



・原田先生：実例を紹介した具体的な講座でした

### 連絡事項

紹介してきました本講座ですが、7、8月に第3回(鷺谷先生)、第4回(松田先生)の講座を予定しています。会場は第2回目と同じく、九州大学工学部本館10番教室ですが、開始時間が11:00となります。お間違いのないよう、ご注意ください。

第4回講座(8月25日:松田先生)では、講座内容について、受講者の要望を事前に聞き、講座内容に反映したいという松田先生からの嬉しい申し出を頂きました。この機に考えて見たい、あるいは講師の松田先生に考えて頂きたい事例がありましたら、松田先生あるいは事務局まで事前にお知らせください。また、解析・議論した内容は、講師松田先生と提案者の双方の同意がない限り、この講座限りとするを事前にご了解ください。

松田先生の講義内容(予定)は、松田先生のWebサイトから見る事ができます。また松田先生へのメールもwebサイト経由でお願いします。

松田先生のWebサイト

<http://cod.ori.u-tokyo.ac.jp/~matsuda/2001/010825.html>  
福岡事務局へのメールは、[k-harada@wjec.co.jp](mailto:k-harada@wjec.co.jp)までお願いします。

今回の講座では、第2回目以降会場が変わり、受講者の方には大変ご迷惑をおかけしております。会場の場所等で、講座当日に事務局へ連絡がある場合は、090-9793-1686(原田)まで。講座当日以外は、092-781-2625(西日本技術開発(株)環境部)原田にお願いします。

応用生態工学研究会福岡 原田圭助  
(西日本技術開発(株))

#### 4) 松山だより

応用生態工学研究会普及委員会(鷺谷いづみ委員長)では、基礎講座・ワークショップ等を各地域で開催しており、いままで札幌、名古屋、大阪、福岡、仙台で実現してきました。

今度は四国で、と検討を進めていましたが、愛媛松山で当研究会役員であった水野信彦愛媛大学名誉教授を初め有力な会員の協力及び大変魅力的なテーマを得られました。下記のように開催する予定ですので、皆様の参加をお願い申し上げます。それと、松山での開催に当たってはいろいろ一緒に準備や当日作業をしていただく実行委員を募集しております。一般参加および実行委員としての参加をご希望の方は下記準備会議参加者或いは東京の事務局まで申込み下さい(電話、FAX、E-mail、何でも結構です)。

##### (1) 準備会議開催

松山でのワークショップ開催を目指して、下記メンバーで初めて準備会議を開き、テーマやスケジュール等の検討をしました。

開催日時：2001年6月8日(金) 14:00~16:00

開催場所：愛媛大学工学部本館ゼミ室(109号)

出席者：

大森浩二(愛媛大学沿岸環境科学センター)

鈴木幸一(愛媛大学工学部、河川工学)

牧 理子(愛媛大学工学部、植生)

川越幸一(株四電技術コンサルタント)

古川整治(株水建設コンサルタント)

熊野可文(応用生態工学研究会事務局)

今回は、2001年9月7日(金)に松山・愛媛大学で準備会議を開きます。実行委員参加希望者は是非お集まり下さい。会場は後日連絡します。

##### (2) 企画案

現時点では以下の企画案が作成されています。開催月日や主要な内容はこの案で実行されますが、詳細は検討中であり追ってお知らせします。

#### 応用生態工学・現地ワークショップin松山

##### 川と泉の生きものたち

##### -重信川流域-

保全生態学の広がりやアセス法施行に伴い、生態系の復元、保全に関する興味が高まっています。しかしそれらの実際の川や泉、そして生物の現状に触れる機会は、専門外の方にはなかなかありませんでした。地元の方々を初め、行政・コンサルタント・大学関係者、学生の方まで、生物生態系、水辺の環境に興味のある方は、是非この機会に水辺の生物の現象にふれてみませんか。

主催：応用生態工学研究会

開催日時：2001年11月30日(金) 10:00~17:00

開催場所：愛媛大学工学部18番教室

〒790-8577 松山市文京町3

プログラム：

午前 10:00-12:00 重信川流域の泉・現地視察  
(希望者のみ)

午後 13:00-17:00 講演及び討議

水野 信彦 (愛媛大学名誉教授)

松山平野の泉のはなし

江橋 英治 (国土交通省松山工事事務所所長) 重信川の多自然型河川工法  
(講演者未定)

ためいけのはなし

鷺谷 いづみ (東京大学大学院)

自然をより深く理解するための協働

井上 幹生 (愛媛大学・理学部)

河川と泉のネットワーク

牧 理子 (愛媛大学・工学部)

河川の帰化植物

大森 浩二 (愛媛大学・理学部)

河川生態系モデル解析

#### 7. いろいろなニュース

##### 新著紹介

・「滋賀の両生類・は虫類・ほ乳類一図解ハンドブック」、松井正文監修、滋賀の理科教材研究委員会編集、新学社、定価500円(消費税を含む)：このシリーズについては、私自身も参画し、この書評欄でも紹介したことがある。淡水魚、水草、水生昆虫、水鳥、水生動物(無脊椎動物が主体)と、早いペースではないが着実に刊行されてきたシリーズが、ついに脊椎動物までたどりついた。執筆を担当された現場の先生、監修者、それに編集を担当してきた新学社の所さんに敬意を表す。カエル博士の松井さんの監修、さすがに両生類やは虫類のところはよくできている。最近になって発見されたナガレヒキガエル、ナガレタゴガエルについても、成体と幼体(オタマジヤクシ)の図と区別点が、明解に示されている。生息場所や生態についても、図と解説でよく判る。小中学生にも馴染みのある動物で、飼育法もていねいに説明され、きっと評判がいいだろう。しかし、本書はそれらの生徒だけではなく、一般の人にも広く利用されることになるだろう。けもの等については、信楽の狸だけでなく、滋賀県の事情がよく判っている。滋賀県内での分布図があればよいとも思ったが、これは保護の面では問題があるので、掲載できなかったのかもしれない。観察しにくい両生類成体の非繁殖時期の生活(水辺から離

れる種類が多い) についての記述が欲しかったが、これは今の時点ではやはり無理な要求。カラー口絵4ページ、全56ページで500円はお買い得だが、一般の書店にはなく新学社への直接の注文となる。

[谷田一三]

・「日本近海産貝類図鑑」、奥谷喬司編著、東海大学出版会、本体価格38,000円：評者の個人的な話からはじめて恐縮だが、小学生のころ吉良哲明さんの「原色日本産貝類図鑑」(保育社1954年)は、内海さんの「原色海岸動物図鑑」とならぶ、宝物の図鑑だった。海岸動物からは離れてしまったが、今回刊行された貝類図鑑は、従来の図鑑をはるかに越える迫力だし、見ても楽しい。まずは種類数、日本近海の5000種を超える海産貝類が揃っている。編者の奥谷さんの専門のイカ・タコをはじめ、ウミウシ、ヒザラガイなども収載されている。とくにウミウシは、生体写真とならんで有殻の種類は貝殻もなっている。他の貝類についても、潜水などによる生態写真が添えられているものも多く、この点でもユニークな貝類図鑑となった。口絵にも貝類の生活を示す大判カラー写真があり、これもなかなかの迫力だ。貝殻の標本写真は、それぞれの執筆者が撮影したとのことだが、組図版のカラー編集も含めてまったく問題のない出来映えである。殻サイズが数ミリの微小貝類も、よく揃っている。一部の微小種は走査型電子顕微鏡写真で示されている(これは明記して欲しかった)。図版にもスケールが欲しいが、これは膨大な作業量になるので、無理な注文かもしれない。学名には、命名者と命名年が明記してあるし、解説などは、和文とともに英文もある。世界標準を越える貝類図鑑となった。ほとんどの貝の末尾にカイ(ガイ)をつける従来の和名を、奥谷さんは慣行和名にもどされた。例としては、ヒメカノコアサリガイをヒメカノコアサリに変更など。これらには異論があるかもしれないが、評者は大賛成だ。これほどの貝類の標準図鑑はしばらくは出ないだろうから、奥谷和名が定着していくだろう。この量と内容での38,000円は安い。すでに定年を迎えられた編者の奥谷さんの元気と熱意に、まずは脱帽と感謝。

[谷田一三]

・「北上川物語」、三陸河北新報社編、河北新報社、本体価格1800円：1988年に出版されたという「北上川物語」の増補改訂版。旧版は大内記者の新聞連載が出版されたそうだ。それに河北町在住のフリーライター、渡辺征治さんが追加取材し新聞連載したものをもとに、本書は構成されている。北上川は、岩手から宮城にまたがる東北の大河。流路延長は200kmを越え、流域面積は10,000平方キロを少し上回る。この大河についてのミニ百科全書としてよ

くできている。歴史からはじまり、経済、文学、治水、民俗、自然、それに親水や保全などの住民の取り組みが、上手にまとめられている。古代から近代にかけての水運と治水。伊達正宗の野望と挫折、それに替わる新田開発のための川村孫兵衛による新川の開削など、地元に住んでいない人にも貴重な知識だ。舟による水運の経験者の老女からの聞き書きもおもしろい。北上川は、洪水による被害、新川開削やダムによる故郷からの移転と、人にとってはやさしいだけではない。しかし、粗朶沈床とその生態的効能、シジミ、ウナギ、サケと川漁で一年を暮らす川漁師など、水との親しい付き合いは今も残っているようだ。ウグイやウナギを神仏の使いとして守る人々もいる。北上川の人々は、厳しい自然のなかで、川との優しいつき合い方を知っている。新聞連載による紙面の制限のためか、テーマによっては書き込みが足りないものもある。また、文学者列伝は、北上川との関わりの少ない人も含まれており、かなり退屈。いずれにしても、このような規模とレベルの図書は、日本の代表的な河川については、まずは作られる必要があるだろう。

[谷田一三]

・「生態系を蘇らせる」、鷲谷いづみ著、日本放送協会(NHK Books)、本体価格920：「保全生態学入門」、「サクラソウの目」など、種あるいは個体群レベルの保全の重要性、保全や復元のために理論と実践について、力強く判りやすく発信してきた鷲谷さんの、生態系の復元、修復についての新著。健全な生態系の持続、生物多様性の保全が、国際的にも国内的にも重要な目標と認知され、環境省の新アセスメント法案に生態系保全が取り込まれ、“上位性、典型性、特殊性”が一人歩きをはじめている。このような動きのなかで、生態系をまじめに考える端緒として、この本はよくできているし、読みやすくしっかりとしたメッセージが伝わってくる。生態系が安定した有機体ではなく、非平衡で、不安定で、不確実性の高い自然(生態系)として、保全されなければならないとの視点は、当然とはいえ重要である。人間の立場からは、順応的管理と協働の重要性が強調されている。中身の詳細は読者に読んで学んでいただくとして、評者は鷲谷さんの世界を駆ける話題の選択、それが有機的に結合されていることに強い印象を受けた。ラスベガスの非自然型アメリカンライフ、ロッキーでの調和的なアメリカ人研究者、イースター島やギリシャでの植生破壊の歴史、足尾銅山の生態系破壊、もののけ姫の対立型自然観、北米ブルーマウンテンでの誤った森林管理の帰結、ニホンシカの問題、グレンキャニオンダムの人工洪水とその背景、霞ヶ浦のアサザなどなど、生態系を巡る旅行記として読んで面白い。1977年に森下郁子

さんの著した「川の健康診断」も、同じシリーズから刊行され、社会的にも重要な役割を果たした。今後ますます重要となる生態系の管理にとって、この本はさらに大きな役割を果たすことだろう。

[谷田一三]

・「環境保全学の理論と実践」、森 誠一監修、編著、信山社サイテック、本体価格2,500円：本研究会の幹事でもある森さんは、若手の保全生態学者では理論、実践ともにがんばっている。友人でもあり期待も大きいので、やや厳しい書評となることを許して頂きたい。共著者のうち、高村さんも浦部さんも長らくの友人、国土交通省の岐阜の自然共生研究センターに特別研究員として勤める吉富さんも、センターの展示などに希有な才能を発揮していることを熟知している。しかし、この本の担当部分（「生物多様性における生き物の論理」、「日本産カワニナの生態とホテル事業」、「河川生態系の展示デザイン」）には、彼らの実践からの知識や才能が十分には現れていない。例えば、カワニナについては、概論の部分と報文（報告）が混在していて、カワニナの生態から見たホテル事業の問題が、理論からも実践からも描かれているようには思えない。吉富さんの担当部分は、理論（概論）だけが書かれていて、具体例がほとんどない。吉富さんの持つ豊かな実践と才能がほとんど読みとれない。教育現場からは、小学校の環境教育、中学校・高校の部活動での実践例（「河川の環境教育実践」と「自然環境と生物部の保全活動」）が、現場教員である前田里美さんと小島裕嗣さんによって紹介されている。後者は事例としては興味深く、イタセンパラ事件の顛末には考えさせられた。この本のタイトルから想像すると、「理論と実践」が刊行されることになるだろうが、読者にとっては理論と実践が中途半端に混在する本よりは、理論編、実践編とはっきりと区別された編成の本のほうが親切ではないだろうか。森さんの英断と発展に期待したい。

[谷田一三]

## 8. 事務局報告

今年度の特徴は、各地域が活発に動き出したことです。札幌は「フゴッペプロジェクト」で共同研究が始動し、名古屋は「現地ワークショップin矢作川」（10/20実施）、大阪は河川整備基金を得て河川環境を鳥の眼で見て評価する研究、福岡は「数理生態学」の基礎講座を開催し、今度初めて愛媛県松山で「現地ワークショップin松山、川と泉の生きものたちー重信川流域」（11/30実施）を開催することになりました。さて、次は北陸・新潟方面かなと期待しています。

この5月に正会員が1,000名を越えました。来年

（2002年度）には学術研究団体登録の申請を出すこととなります。応用生態工学研究会も丸4年を迎えるにあたって、“次のステップ”に入りそうです。

[2001年7月5日現在会員数]

正（学生）会員 1,025名  
賛助会員 58法人

[研究会活動]

2001年度（平成13年度）

- 4. 1 平成13年度開始
- 4月 「応用生態工学研究会福岡」に指定銀行口座開設。札幌、大阪につき3口座目。  
福岡銀行渡辺通支店  
(普通預金口座) 1 7 2 2 7 8 8  
(名義) 応用生態工学研究会  
福岡代表 原田圭助
- 4. 6 ニュースレターNo.14発行。会誌「応用生態工学」に報文種類として『事例研究case study』新設。
- 4. 7 「次期役員候補者選考委員会」（第1回）（麹町会議室）
- 4.18 交流委員会開催（麹町会議室）2001年度海外派遣研究員審査。
- 4.25 福岡講習会第10回「流水と生態系その2ー沿岸域」講師：東 幹夫教授（長崎大学）。99名参加
- 5.14 交流委員会開催（豊田市矢作川研究所）10月20日現地ワークショップin矢作川の開催決定。
- 5.18 会員数：正（学生）会員1,018名、賛助会員58法人。初めて1,000名を超える。
- 5.26 福岡基礎講座「数理生態学への誘いー保全生態への適用を目指して」（九州大学国際ホール）講師：巖佐 庸（九州大学教授）「数理生態学で何ができるか」。67名参加。
- 6. 1付け 河川整備基金助成決定。150万円。助成事業名「応用生態工学の国際的ネットワーク構築（その2）」
- 6.15 「次期役員候補者選考委員会」（第2回）（麹町会議室）。第15回幹事会（麹町会議室）5ヶ年計画中間総括
- 6.16 第14回理事会（都市センターホテル606会議室）5ヶ年計画中間総括・次期役員

- |         |  |  |
|---------|--|--|
|         | 候補者  | (九州大学工学部)  |
| 6.16～17 | 「生態学リサーチマネジメントをアシストする勉強会(第1回)」(都市センターホテル) 89参加。                                      | 講師: 松田裕之(東京大学海洋研究所助教授)「数理生態学の適用性—実事例への適用へ向けて」開催予定。   |
| 6.23    | 福岡基礎講座「数理生態学への誘い—保全生態への適用を目指して」(九州大学工学部)<br>講師: 原田泰志(三重大学助教授)「数理生態学の適用性—魚類」。 59名参加。  | 9. 7 松山実行委員会開催予定(愛媛大学) 14:00～  |
| 7.10    | ニュースレターNo.15発行<br>会誌「応用生態工学」4巻1号発行予定、ミニ特集「健全な生態系とは?」                                 | 9.27 第8回会誌編集委員会開催予定(麹町会議室) 18:00～<br>9.28 第16回幹事会開催予定(麹町会議室) 19:00～  |
| 7.14    | 福岡基礎講座「数理生態学への誘い—保全生態への適用を目指して」(九州大学工学部)<br>講師: 鷺谷いづみ(東京大学教授)「数理生態学への期待—植物と生態系」開催予定。 | 9.29 第15回理事会開催予定(科学技術館)<br>9.29～30 第5回大会開催予定(東京、科学技術館サイエンスホール)<br>9.29 第5回総会<br>9.29 公開シンポジウム『河川の自然復元』<br>9.29～30 第5回研究発表会 |
| 7.31    | 大会運営委員会開催予定(麹町会議室) 16:00～<br>大会実行委員会開催予定(麹町会議室) 17:00～                               | 10.20 現地ワークショップin矢作川(現地及び豊田産業文化センター)開催予定<br>11.30 応用生態工学現地ワークショップ松山「川と泉の生きものたち—重信川流域」(愛媛大学)開催予定                            |
| 8.25    | 福岡基礎講座「数理生態学への誘い—保全生態への適用を目指して」  | 12.15 会誌「応用生態工学」4巻2号発行予定、特集「長良川河口堰のモニタリング評価」(仮題)   |

### 応用生態工学研究会事務局

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第七麹町ビル(2F 226号室)

TEL. 03-5216-8401 FAX. 03-5216-8520

E-mail: see@blue.ocn.ne.jp ホームページ: <http://www.ecesj.com/>

[地下鉄有楽町線麹町駅2番出口徒歩3分]

[地下鉄半蔵門線半蔵門駅徒歩7分]

[JR中央線四ツ谷駅徒歩10分]